市民にとっての「記憶の表象」としての広島東洋カープ

中山 直音

スポーツと地域社会は強い繋がりを持っているとされ、日本国内のプロスポーツでも、フランチャイズ制度が導入されて以来、地元プロスポーツチームとその本拠地地域の強い繋がりが全国各地に見られるようになった。ただし、広島東洋カープと広島県広島市の関係性は特異的に強い繋がりを持つ地域として知られる。

戦後復興施策として創設された、特定の親会社を持たない市民球団という固有性を持つ広島東洋カープとカープファンとの関係性は、先行研究においても、心理学や経済学・経営学、社会学、さらには地域活性等の多様な専門領域で議論が展開されてきた。しかしこれら既存研究の多くは研究が実施された当時に着目しており、球団創設時から現在までの時間経過に伴う関係性の変化や連続性についてはあまり考慮されていない。

そこで本研究では、広島東洋カープが市民に勇気を与える戦後復興施策として創設された背景が同球団の固有性にも繋がる点に着目し、球団創設時の、被爆と戦後復興という歴史的背景を踏まえつつ、現在に至るまでに築かれた広島東洋カープとカープファンとの関係性やそこに受け継がれる内実について考察した。

本稿では、まず関連先行研究を精査した後、本研究の立ち位置を明確化した。それを踏まえつつ、『戦後ヒロシマの記録と記憶 小倉馨の R・ユンク宛書簡』に記された戦後復興期の被爆者たちの物語をもとに被爆と戦後復興の背景を概観した上で、広島市での現地調査と参与観察を遂行した。その結果、戦後復興期には多くの広島市民が原爆によりもたらされた逆境の中を力強い生への情熱を持って生きており、その思いを形に残るものに込めて継承しようとするダイナミズムが見えてきた。また、広島東洋カープが現代の広島市民の生活に深く浸透する背景には戦後復興施策として市民を勇気づけた同球団と「樽募金」に見られる資金援助で球団に貢献する市民の 2 人 3 脚の関係性が生み出した一体感や市民による球団への強い情熱が口承伝承などにより世代を超えて継承された歴史があることもわかった。

以上の結果は、広島東洋カープが戦後復興期の広島市民にとって生への情熱を込める対象であり、それが現代まで継承されている可能性を示唆するものである。市民球団という性質から資金難で解散・合併の危機に瀕するといった逆境を乗り越えて成長していく広島東洋カープの姿は、戦後復興期の広島市民に同じく逆境下を力強く生き抜く自らと重ね合わせ、それにより生まれた一体感が自らの生への情熱を球団に込めることを助長したと推察された。

従って、広島東洋カープは戦後復興期を力強く生き抜いた広島市民によって込められた生への情熱を現代まで継承する「記憶の表象」とであると結論づけられた。(環境行動学)